

## 聖靈病院における生活訓練事業

聖靈病院カトリック社会事業室

坂 部 司

### はじめに

視覚障害者（特に中途視覚障害者）を対象とした生活訓練事業を行っている施設（厚生省委託歩行指導員養成講習会修了者を配置している施設）は、平成2年度現在では、一般施設42ヶ所・国立施設5ヶ所・盲児施設8ヶ所・盲学校15ヶ所・その他6ヶ所となっている（日本ライトハウス、1990）。東海3県では、3ヶ所だけで充分に視覚障害者のニードに対応できているとは決して言えない。特に増加しつつある糖尿病による網膜症・腎症や高齢化等、視覚の障害だけでなく、その他に合併症として現在も治療が必要である視覚障害者への対応が東海地区だけでなく全国的な問題である。

昭和56年6月に眼科のみならず他科も含めて何らかの医療を必要とする中途視覚障害者のための生活訓練機関として、愛知県医師会・愛知県眼科医会等の医師会・視覚障害者に携わる人々等、多くの方々の賛同を得て愛知視覚障害者援護促進協議会（以下、愛視援）が設立された。そして、本病院においては医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）・眼科外来・カトリック社会事業室が、愛視援への援助事業として生活訓練を開始した。

### 1. 聖靈病院の概要

本病院は社会福祉法人聖靈会の事業の一つであり、聖靈奉侍布教修道女会が母体の総合病院である。

- ① 開 設 昭和20年（1945） 総合病院認可 昭和32年（1957）
- ② 面 積 敷地 11,165m<sup>2</sup>、床総面積 22,348m<sup>2</sup>、地下1階・地上5階
- ③ 病 床 数 300床
- ④ 診療科目 内・精・消・小・外・整・脳外・小外・皮・泌尿・産婦・眼  
・耳・リハビリ・放・歯科口腔外科の16診療科
- ⑤ 職 員 数 約430名

- ⑥ 付属施設 看護専門学校(1学年30名)  
老人保健施設「サンタマリア」60床 平成3年4月開設
- ⑦ 交通機関 名古屋市のほぼ中央に位置し、名古屋駅（JR・名鉄・近鉄）より地下鉄（名古屋市）で30分、豊田市方面から名鉄線で30分、共に「いりなか駅」下車徒歩2分。  
周囲には中学・高校・大学・教会等が建ち並び、緑も多く生活のしやすいところである。

## 2. 生活訓練事業の現状

表1が生活訓練事業における年表である。開始当初は各スタッフも迷いながらの対応であったが、1年1年少しずつ事業の拡大に努めてきた。当初の訓練

表1. 生活訓練事業の年表

年 月	事 業 内 容
昭和56年 6月	愛知視覚障害者援護促進協議会発足（本病院援助事業）
昭和57年 8月	厚生省委託歩行指導員養成講習会（日本ライトハウス）へ職員（シスタ上野直子）を派遣（愛知県第1号）
同 12月	入院（2週間）による歩行訓練を中心とした生活訓練開始
昭和58年 4月	外来による訓練の導入
昭和59年 8月	前歩行訓練士退職のため上記講習会へ職員（筆者）を派遣
昭和60年 4月	名古屋市身体障害者総合リハビリテーションセンター設立へ建設委員として参画
昭和61年 4月	訪問による訓練の導入
同 8月	第28回関西歩行訓練士会にて研究発表：大阪市「聖靈病院における歩行訓練の報告」
昭和62年 3月	歩行訓練士研修会：国立身体障害者リハビリテーションセンター主催（所沢市）へ職員（筆者）を派遣
同 8月	第1回親睦会（聖歩会）開催
同 4月	ケースにより入院訓練期間を3週間に延長
昭和63年 8月	第8回歩行講習会フォローアップ研修会にて研究発表：大阪市「視覚障害者の体力」
同 11月	第12回日歩協研究大会発表：函館市「聖靈病院における歩行訓練」
平成元年 3月	ソニックガイド・モーフットセンサー指導員養成講習会（日本ライトハウス）へ職員（筆者）を派遣
同 12月	モーフットセンサー訓練の開始、「聖歩会ニュース」の発行
平成2年 7月	ソニックガイド訓練の開始

方法は、入院（2週間）という方法で行っていたが、内容としては院内の生活に慣れ、直線歩行・ガイドラインテクニックくらいで終了しており、外来・訪問での訓練をする余裕もなかった。しかし、盲婦人・盲老人や三療開業者等の訓練希望者もあり、外来・訪問での生活訓練を導入した。

また、昭和61年からは2週間の入院訓練では、充分な訓練を行うことができず、消化できずに退院しなければならない患者もあり、患者によっては3週間の入院訓練を行い、退院後、外来または訪問による訓練へと進む場合もある。

生活訓練の中で問題になっていたロービジョンにおいては、昭和62年3月に国立身体障害者リハビリテーションセンター主催の歩行訓練士研修会「ロービジョンの歩行」に参加する機会があり、同年4月から積極的にロービジョンへの訓練が可能になった。

院内では、看護学生や新任看護婦に視覚障害者のリハビリテーションとして「手引き」の指導を行っている。

### 1) 対象者

白杖歩行を中心とした訓練が可能な者。

### 2) 事業の種別

#### ① 歩行（白杖・電子機器）

入院：約3週間（18日） 40～60時間（1名のみ）

外来・訪問：週1回 1回の時間は1～2時間

ロービジョン：単眼鏡・遮光レンズの処方、夜間歩行

#### ② 相談

生活訓練・補助具・ルーペ等の問い合わせがあり、年々増加しつつある。年間の面接・相談件数を表2に示した。昭和59年度については12月からの資料である。また、比率については昭和60年度を（100）とした。

#### ③ その他

患者への生活訓練の他に、ガイドヘルパー養成講習会・視覚障害者団体の勉強会・看護学校（現在3ヶ所）等で依頼があれば講義や実技（手引きの仕方）の指導を行っている。依頼件数においても年々増加の傾向があり、各市における視覚障害者援助事業への理解がうかがえる。

年間の講習会件数を表3に示した。昭和59年度については12月からの資料である。また、比率については昭和60年度を(100)とした。

### 3) 費用

眼科リハビリテーションとしての保険申請ができないため、本病院が奉仕としてこの事業を行っている。ただし、交通機関を利用した訓練中の費用と訪問時の指導員の交通費は実費である。

### 4) 手続き・カリキュラム

図1のような手続きで行っている。  
面接(毎週土曜日の午前中に歩行訓練士が担当)を行い、訓練内容の説明・訓練方法・訓練開始日を決定し、眼科・耳鼻咽喉科(聴力検査)を受診する。面接時の金銭的な問題や他施設への紹介についてはMSWが加わり、スムーズに訓練が行われるよう心掛けている。

カリキュラムについては、歩行訓練がかなりのウエイトを占めているが、愛視援訓練室のボランティアの協力により機織り・調理・裁縫・点字訓練の基礎を行い、訓練終了後も継続して愛視援訓練室を利用できるようになっている。

表2. 事業の種別(面接・相談件数)

年度	件数	比率
昭和59年	14	22
昭和60年	62	100
昭和61年	84	135
昭和62年	93	150
昭和63年	108	160
平成元年	89	143
平成2年	107	172

表3. 事業の種別(講習会件数)

年度	件数	比率
昭和59年	1	9
昭和60年	11	100
昭和61年	9	99
昭和62年	15	186
昭和63年	14	127
平成元年	22	200
平成2年	16	145

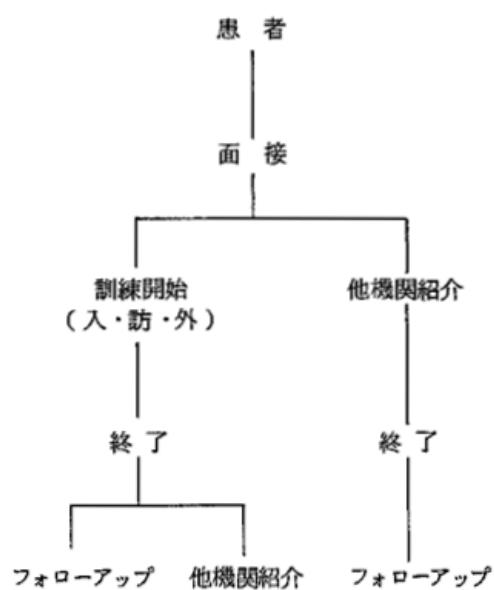


図1. 生活訓練までの手続き

### 5) 他のスタッフとの連携

生活訓練を実施していく中で（特に糖尿病患者など合併症を持った患者・障害受容のできていない者等）医師・看護婦・M S Wとの密接な連携は不可欠である。本病院では表4のように連絡を取りあい、訓練がスムーズに行われるようになっている。

### 6) 生活訓練実績

昭和57年度から平成2年度までの生活訓練実施者数は昭和62年度からは20数名と変わりはないが、訪問・外来での実施者が増加している。また、性別は男女ほぼ同数で、全体

の平均年齢は45.3才であった（表5の1）。居住地域は名古屋市内が半数を占め、三河地区（特に東三河）が少なく、これから一層のPR活動が必要である（表5の2）。

本病院への紹介施設は医療機関が半数を占めている。このことについては医師会等の協力と理解によるものと思われる。行政からの紹介が少ないので、PR不足と訓練までの手続きの中で行政があまり関与していないからである（表6）。

原因疾患では全国的に同じ傾向であると思うが、糖尿病網膜症・網膜色素変性症が半数を占めている（表7）。

表4. 事業の種別（他のスタッフとの連携）

スタッフ	内 容
眼科医	診察・治療、他科への診察依頼、訓練士へのアドバイス
内科医	診察・治療、訓練士へのアドバイス
耳鼻科医	診察・治療、訓練士へのアドバイス
病棟 看護婦	訓練時以外の健康管理、インスリン自己注射の指導、訓練士へのアドバイス
M S W	面接・他機関紹介時の手続き、訓練士へのアドバイス

表5の1. 生活訓練実施者数と平均年齢

年 度	入院	訪問	外 来	合 計	年 齡
昭和57年	8	0	0	8	44.6
昭和58年	15	0	3	18	48.0
昭和59年	15	0	0	15	49.1
昭和60年	18	0	5	23	44.5
昭和61年	14	4	2	20	48.7
昭和62年	15	6	6	27	41.9
昭和63年	18	4	9	26	48.0
平成元年	14	10	2	26	46.3
平成2年	12	8	8	28	41.8
合 計	124	32	35	191	45.8
比 率	65	17	18	100	

表5の2. 居住地域別

(人)

名古屋市	(81)	53.3 %	名南地区	(13)		東三河地区	(3)	
名北地区	(22)		知多市	4		豊橋市	1	1.9 %
瀬戸市	6		大府市	4		蒲郡市	1	
春日井市	5		豊明市	1	8.6 %	渥美郡	1	
小牧市	1	15 %	常滑市	1		県外	(10)	
犬山市	2		半田市	2		三重県	4	
愛知郡	2		東海市	1		岐阜県	8	6.6 %
西春日井郡	4		西三河地区	(13)		滋賀県	1	
丹羽郡	2		刈谷市	2		東京都	1	
名西地区	(9)		安城市	3		青森県	1	
津島市	2		豊田市	4	8.6 %			
一宮市	2		岡崎市	1				
福沢市	1	6 %	高浜市	1				
海部郡	2		碧南市	1				
葉栗郡	1		幡豆郡	1				
中島郡	1							

表6. 紹介施設(昭和59年12月から  
平成3年3月までの126名)

紹介先	人 数	比 率
総合病院	89	31.9
知人	24	18.9
個人医院	19	14.9
名古屋ライトハウス	17	13.3
鶴舞図書館	6	4.7
愛視援	4	3.1
県難病相談室	3	2.3
更生相談所	3	2.3
歩行訓練士	3	2.3
福祉事務所	4	3.1
盲学校	2	1.6
フィラデルフィア (ボランティア団体)	1	0.8
M S W	1	0.8

表7. 原因疾患(主なる疾患・126眼)

疾 患	眼 数	比 率
網膜色素変性症	84	26.9
糖尿病網膜症	81	24.6
視神経萎縮	18	10.3
眼球ろう	8	6.3
緑内障	6	4.7
網膜剥離	4	3.2
ベーチェット氏病	4	3.2
網脈絡膜萎縮	4	3.2
小眼球症	4	3.2
黄斑部変性症	2	1.5
角膜潰瘍	2	1.5
角膜白斑	2	1.5
虹彩欠損	1	0.8
クロロキン網膜症	1	0.8
強度近视	1	0.8
ぶどう膜炎	1	0.8
無眼球症	1	0.8
先天白内障	1	0.8
角膜混濁	1	0.8
その他	5	4.3

### 7) 生活訓練終了者親睦会（聖歩会）

本病院の生活訓練では、常に1対1の訓練のため患者間のコミュニケーションを充分に行うことができない。当初より親睦会（患者会）を開催したいと思っていたところ、ある患者より開催依頼があり、昭和62年3月に第1回目の親睦会を開催することになった。毎年春に開催し、テーマを決めてディスカッションをしたり、体験談を報告したりしている。この親睦会の開催は、今までの生活訓練方法を見直すいい機会でもある。

また、昭和63年7月に音声ワープロが愛視援の訓練項目に導入されたことをきっかけに、患者の作成による「聖歩会ニュース」を平成元年12月より、3月・6月・9月・12月の年4回発行して情報を提供している。

## 3. 今後の課題

医療機関における眼科リハビリテーションを進めるにあたって、以下のような課題が挙げられる。

### 1) 医療スタッフとの密接な連携

医師からの失明（またはロービジョン者に対する回復の不能告知）が、適切なときに適切な手段でなされるとともに、看護婦・MSW・歩行訓練士等の医療スタッフが連絡を取りあえば、早期リハビリテーションが可能になるとと思われる。

### 2) 福祉事務所との連携

居住地域で様々なサービスが受けられるよう、連絡を密接にすることが必要である。

### 3) 家族との連携

一番身近にいるのは家族である。その家族が視覚障害ということを理解していないかったり、適切な接し方を知らなかったりということもあるため家族への指導が必要である。

### 4) 眼科リハビリテーションとして保険の点数化

診療報酬として認められることによって、病院として収益となり、また、病院における歩行訓練士の必置性につながっていくと思われる。

### 参考文献

- 坂部司 1988 聖靈病院における歩行訓練 第12回視覚障害歩行研究会論文集 28~29
- 日本ライトハウス 1990 厚生省委託歩行指導員養成講習会修了者名簿 歩行訓練研究, 5, 28~37

#### 《インフォメーション2 図書-2》

弱視教育教育課程ー弱視学級における指導の形態及び内容・方法ー  
 (横浜市立神奈川小学校) 平成3年2月刊 B5判 102ページ  
 心身障害児の感覚・運動機能の改善及び向上に関する研究(特別中間報告書)  
 平成3年3月刊 B5判 83ページ 国立特殊教育総合研究所  
 第8回海外研修報告書(平成元年度) 平成3年1月刊 B5判  
 182ページ 清水基金  
 レミの日記ー盲導犬Q&Aー(二井矢旬子著 味田基編) 1991年2月刊  
 A6判 63ページ 栃木盲導犬センター  
 盲聾重複障害児の教育的処遇の実態に関する調査研究(平成2年度日本船舶振興会補助事業研究成果報告書) 平成3年3月刊 B5判  
 84ページ

#### 《インフォメーション3 研究雑誌: 1990年10月~1991年3月》

フィリピンの盲人たち(山口和彦) 障害者の福祉 90年11月号  
 Pp. 18-20

灯のついた盲ろう者の福祉(特集) 障害者の福祉 90年12月号  
 視覚障害者(児)に対する態度について(河内清彦) 障害者の福祉  
 91年2月号 Pp. 18-22

大企業における障害者雇用(谷 素子) 障害者の福祉 91年2月号  
 Pp. 37-41

「点・線・面」で構成する視覚障害者の行動科学の一考察と将来の可能性  
 と展望(村瀬省三) 東邦学誌第19号 創立25周年記念特別号(東邦学園短期大学)

早期失明者における空間的問題解決能力の発達の縦断的研究(山本利和)  
 心理学研究 61, 413-417 平成3年2月